



# 家具職人として半世紀以上

新潟市西蒲区 齋藤吉雄さん(80歳)

地元角田浜の齋藤吉雄さんは、毎日早朝にお寺の開門と掃除をしてきている。家具職人の経歴があり、扉や踏み台など日常の簡単な修理もお手のものだ。「早起きして仕事をするのが、健康のためにもなるんですよ」と屈託なく笑う。花器の汚れも丁寧に落としてくれるので、供花が長持ちするようにするなど仕事丁寧で、妙光寺としてとてもありがたい存在となっている。

吉雄さんは9人兄弟の6番目だ。実母のスギさんは、吉雄さんを生んだ翌日に亡くなったため、下の3人の弟妹とは腹違いだという。「ヤギの乳を貰ってきて飲んでいたので、私の育ての親はヤギなんですよ」と冗談めかす。実際には年の離れた姉たちが、面倒をみてくれたそうだ。

(2ページに続く)

# 妙たえの光ひかり

復刊135号



## 行事案内

かいさんえ

### 『妙光寺開山会』

5月30日(土) 午前9時半開門

江戸時代から続く春の伝統行事「ご判さま」が『開山会』と形を変えて3年目。華やかな稚児行列や元ブルーハーツのドラマー梶原徹也さんの『奉納演奏』、声明とドラム、和太鼓とのコラボレーションなど、観客参加型のコーナーもあります。参道にはお店やキッチンカーも出ます。ご家族、お友達、皆様でご参加ください。※詳細は開山会パンフレットをご覧ください。



ちご

### お稚児さん募集

5月30日(土) 午前9時~12時

上記『開山会』にあわせ、法要に出仕していただくお稚児さんを募集します。古式ゆかしい衣裳を着けてのお練りなど、子どもたちにとっても貴重な体験となります。

■5歳~10歳くらいまでの男女児20名

■参加費：5千円

※詳細は開山会パンフレット裏面をご覧ください。



### 月例ボランティア

毎月15日 午前9時~11時半 / 午後1時~3時

堂内や境内の清掃等をお願いしています。都合の良い時間にお越し下さい。一日可能な方は昼食のご持参をお願いします。 ※5月のみ27日(土)に変更します。

### 春のお彼岸中日法要

3月20日(金)祝 午前10時~12時

午前 10時 安穩廟法要  
10時30分 春季彼岸法要…本堂  
11時30分 住職法話  
12時 お齋(昼食)

お彼岸は春秋2回、陽気も良くなり昼夜の時間が同じになるこの日、心の偏りをなくして仏様の教えを修行しましょうという古くからの行事です。一般社団法人「生支縁」の専門家による任意後見相談コーナー(10時~12時)もあります。

### 第18回浄土講座

#### 『本場のやさしい韓国料理教室』

5月9日(土) 午前10時~12時

■定員：15名  
(定員になり次第締切)  
■参加費：500円  
■講師：宋セイヒさん  
※別紙チラシをご覧ください。



### 第19回浄土講座

#### 『苔博士に学ぶ 楽しい苔玉作り』

6月20日(土) 午後1時半~3時半

■定員：20名(定員になり次第締切)  
■参加費：500円  
■講師：佐藤征也さん ※別紙チラシをご覧ください。

### 信行会

#### (お経と寺ランチの会)

毎月第1水曜日 午前9時~11時

●3/4日(水) ●4/1日(水) ●5/6日(水)  
●6月3日(水) ●7/1日(水)

お参り、お経練習、瞑想、作務、等があり、終了後みなでお昼を頂きます。予約申込み不用。当日直接お寺へお越し下さい。

■参加費：お志を各自賽銭箱にお願いします



### あとがき

県内でも上越地方は、例年以上の大雪に見舞われました。今年の冬も、やっと終わろうとしています。「月どこかで春が生まれてる~月」と口ずさみながらカレンダーを眺めます。どうぞお寺にお出かけください。





西蒲区 齋藤吉雄さん

家具職人として修業の日々

中学校を卒業すると、柏崎にある木工の訓練校に1年間通い、技術を学んだ。卒業後は、東京の大きな家具屋に就職したが、最初の4年間は、家具職人としての心構えを仕込まれるばかりで、なかなか仕事を教えてもらえず、やきもきする日々だった。耐えかねて退職を申し出ると「見込みがあるから厳しくしていたのだ」と引き留められた。その言葉に迷い

はしたものの、男が一度決めたことは覆せないと答えると、「お前は何処に行っても大丈夫だ」と認めてもらえた。当時の親方のこの言葉が、ずっと心の支えになってきた。

その後はいくつかの会社で家具職人としての腕を磨いた。当時は振り返ると、仕事もたくさんしたが、お金もたくさん使う日々だった。駅から職場までの間に飲み屋街があり、給料が入ると仲間と飲み歩く毎日だった。飲みすぎて無一文になり、

友達の家に転がり込んで、ご飯を食べさせてもらっていたこともある。「若かったので、金を馬鹿にしていたんですよ」と苦笑す

る。それでも、1日として仕事を休む日はなかった。それだけ仕事が好きだった。

故郷の魚田浜で

結婚後、しばらくは家族で東京に暮らしていたが、子どもが生まれたこともあり、31歳の時に故郷の魚田浜に戻ってきた。都会の生活がすっかり身につけてしまっていたため、戻ってきた当初は、ネオンも信号も飲み屋もない、たまに来るのは回覧板だけという田舎に愕然としたそうだ。子供が成人したら、独立し、道具箱一つ持って、全国を自由にまわる職人になろうと心に決め、凶面一つでも作れるように腕を磨いた。

その夢は叶えられなかったが、60歳で定年した後、縁のあった親方に誘



完成した仏壇



制作中の齋藤さん

われて当時地元で大手と言われた山下家具の下請けの仕事をするようになった。新潟では有名な親方で、職人を一番大事にしてくれる人だった。

職人は金よりも気持ち。そうしたつき合いをしてくれることが嬉しかった。人生で出会った親方たちのなかで一番尊敬している人だ。なんとその親方が、鎌田上人の奥さんのお父さんだと後で知り、ご縁を感じた。

古い仏壇から新しい仏壇を

齋藤さんは、お寺で働き始めて3年になる。地元世話人の推薦だった。昨年、ある檀徒の農家が家を建て替えることになり、古くて大きい仏壇は新築の家に収まらない。「先祖代々大事にしてきたから」と院首が相談を受けて、齋藤さんが古い仏壇の部材を使って新しくすることになった。

「二人で頭を突き合わせあれこれ試行錯誤をしたが、良いものができたと思う」と喜ぶ齋藤さん。「妙光寺は檀徒の仏壇の心配から、行事で振舞われるおときも、当番さんの思いがこもっていてとても美味しい。心が温かいお寺だと思っている。自分も80歳を過ぎていつまで続けられるかは分からないが、身体が動くうちは自分に出ることをしたい。」と齋藤さんは語ってくれた。(住職記)

安 穩

小川良恵

いまだ気づかぬ苦しみ



消防訓練

薄っすらと雪の積もる1月21日、新潟市消防局による消防訓練が妙光寺で行われました。1月26日の文化財防火デーを前に毎年行われる訓練で、市内各所の文化財を持つ施設で開催されています。私も、逃げ遅れた人の役で少しだけ参加し、防災について考える良い時間となりました。

お寺は365日、蝋燭や線香を灯すため、火災には常に気をつけなければいけません。妙光寺も、正和2年(1313年)の開創以来、2度の大火災にあつてることが記録として残っています。ありがたいことに、現代では火災報知器や消防設備、また事故が起きにくいストーブなどのおかげで、未然に防ぎやすい環境ではありませんが、気を引き締めていきたいと思えます。

「なお火宅のごとし」

さて火災という、お経の中には「三界さんがいは安きこと無し、な

お火宅かたくの如し」と説かれておられます。「三界」は私達の生きているこの世界のこと、迷いの世界であるこの世には安らかなことなどなく、「火宅」つまり燃えている家の中にいるよう

だ、という意味です。この言葉は、作家・檀一雄の遺作『火宅の人』の由来ともなっています。しかしながら、この世が火宅のようだと聞いてあまりピンとはこないかもしれません。確かに、辛いことや苦しいこともあるけれど、そればかりではないと大抵の人は思うでしょう。まさにここが、私達が凡夫である由縁です。

根本の苦しみに気づく

「私達は燃え盛る家という危険な場所になりながら、目先の楽しさに気をとられて、根本の苦しみに気づかない状態にいる」とお釈迦様は説かれています。

苦しみや悲しみからどうすれば解放されるのか、という問いに答えるのが仏様の教えであると言われれば、すんなりと受け入れられますが、苦しみに気づ

かないとはどういうことなのでしょう。か。

昨今、セクハラやパワハラなど様々なハラスメントが認識されています。しかし「昔前までは、しばしば当たり前のことや、厳しい指導、冗談として見過ごされてきました。たとえば、上司が部下を大声で叱責したり、長時間労働を強要したり、ある種の侮辱を加えることさえ、教育や鍛錬として容認されていました。逆らえば根性がないと非難される風潮もあり、多くの人

が心身の苦しみを抱えながらも、これが社会人の常識と信じて気づきませんでした。現在では、こうした行為がハラスメントと定義され、被害者が声を上げやすくなりましたが、当時はまさに「火宅」のなかにいるような状態だったといえるかもしれません。

同じように私達は未だ気づかない苦しみに、知らず知らずのうちに悩まされているものです。常にそのことを忘れずに、日々を過ごしていきたいと思えます。

◆“菩薩の森”菩薩像の台座設置工事◆ 1月7(水)、8日(木)

春から整備を再開する菩薩の森で、菩薩石像を安置する台座石を本格的な雪になる前に設置しました。幸い曇り空のもとで作業が予定通り完了しました。3月には百日紅や、桜、モミジ等の花木もさらに植栽して、5月30日には新たに8体の菩薩像が安置されます。景観が一変します。



◆恒例の角田地区年頭お経会と新年会◆  
2月1日(日)

地元角田浜地区の檀徒による恒例の会です。今年も1年間妙光寺の各種行事を支えていただきます。本堂での読経の後は、新年会で遅くまで盛り上がりました。



◆新春厄除け祈願祭◆  
2月7(土)、8日(日)

厄年に当たる方を中心に、今年の家内安全や健康祈願等各種の御祈願をする祭礼でした。お札のみの方を含めて2日間62名のお申し込みでした。



◆西蒲消防署による防火訓練◆  
1月21日(水)

西蒲消防署からの要請で、全国文化財防火デーに合わせた防火訓練を行いました。消防車他の救急車両3台、消防隊員20名という大掛かりなもので、国有形登録文化財3点を所有するので大変有意義な訓練でした。



河津桜のつぼみ



寺のうごき



ロウバイ

◆雪の境内から春の気配へ◆

雪の境内



梅の花



◆第17回浄土講座◆  
(第2回お坊さん見習い講習)  
11月22(木)、23(金)、24日(土)

仏教の教えをやさしく解説する3日連続の講座。良恵住職の他、鎌倉市円久寺の松脇住職、妙光寺修徒で北海道大学大学院の桜井教授による楽しい講義でした。3日間連続の方から1日だけの方まで延べで38人が参加されました。



◆年末年始にぎわう◆ 12月31日(水)～1月2日(金)



日中の午後に変更して2回目の“大晦日年末詣”は、雪交じりの雨天で寒い日でしたがこれまでにない230人の方々にぎわいました。法要後順番に鐘撞き、福引き、あずき湯、すめめ焼き等々で楽しみました。

元旦と2日の年始参りは例年並み。初参り後、例年人気のお茶席では120人が新年のお抹茶を味わいました。



# 妙光寺という場所に『菩薩の森』をつくる

妙光寺『菩薩の森』事業は、昨年10月27日お会式で、最初の7体の開眼法要が行われました。28体の菩薩像の監修をお手伝いいただいているのが、西区在住の美術評論家・大倉宏さんです。大倉さんのお仕事や妙光寺とのご縁について、うかがいました。

**Q** まず、妙光寺とのご縁を聞かせてください。

**大倉** 2002年に陶芸家の中野巨さんの個展が、初めて妙光寺で開かれました。それを見に来て、個展の批評を新潟日報に書いたのが最初です。中野さんの作品が素晴らしいだけでなく、お寺はもともと文化の発信地だったのに江戸時代に葬儀の場所になって、生者の文化と縁がなくなりました。それを本当に残念に思っていたので、妙光寺はかつてのお寺の役割を再発見する場所になると感じました。

**Q** それで安穩会員になられたんですか？

**大倉** いえいえ（笑）その後、旧斎藤家別邸の保存運動などの中で、当時住職だった小川さんと顔を合わせるようになりま

した。その頃、千葉にいた母が新潟の施設に入るようになって、お墓のことも考え始めていたら、新発田にあったお墓を名古屋に移すことになり新発田のお寺とも縁がなくなっていました。安穩廟のことは知っていたので、小川さんに相談して安穩会員になることにしたんです。

**Q** お墓を安穩廟にした決め手は何ですか？

**大倉** ヨーロッパを旅した時に、墓地がすごく綺麗だったんです。母や自分が亡くなった後は、そこに来ること自体が気持ちいい場所にお墓があるのいいと考えていました。妙光寺の境内も、庭のような空間になっています。母は2012年3月に亡くなり、京住院で見送ることが出来ました。

**Q** 新発田市のご出身なのですか？

**大倉** 新発田には小6までいただけで、その後は千葉県船橋市で育ちました

**Q** 美術の方に進んだのはなぜですか？

**大倉** 幼いころから絵は好きでした。母のいとこに新発田出身の画家・佐藤哲三と親友だったというおじさんがいたり、家にあった画集を眺めたりしていました。でも高2までは理系志望だったんです。ところが物理の授業がチンプンカンプンになり自信をなくし、では美術に進もうと思うようになりました。最初は油絵をやるうと思うんですが、高3で美術予備校の夏季講習に通った時に、絵を描くことそのものに迷いを感じてしまっって、結局油絵科受験を



大倉さんの墓碑は華雪さんの書。彫りは漆山さん

のに惹かれたのは、奈良のお寺を回って仏像を見て歩いたのも関係してましたね。

**Q** 新潟にはいつお帰りになつたんですか？

**大倉** 当時の芸大は就職活動をする人はあまりいなくて、私も卒業後は船橋の自宅で彫塑をやっていました。気持ちはあるけれど、発表しようと思うレベルのものができない。そのうち生まれ故郷の新潟のことが気になつてきたんです。それから画

集で親しんでいた画家・佐藤哲三にも関心が向き、彼の絵をもっと見たいと思えました。佐藤哲三は蒲原平野の風景画を沢山描いた画家で、彼の絵が頭から離れなくなりました。それで新潟のアパートで一人暮らしを始めたのが1983年10月1日、26歳の時でした。

**Q** 新潟のどんなところが魅力だったんですか？

**大倉** 12歳で新潟を離れているので、さほど覚えていません。だから知りたかったんです。ただ関東では真冬なのに青空が続く。「これは変だなあ」と思っていました。冬が晴れていないところ、佐藤哲三が描いたような風景のところで暮らしたい。鮭が生まれた川に帰るような感じだったかも。

**Q** 新潟ではどのような生活を？

**大倉** アルバイトをしながら県内外の佐藤哲三の絵を見て回る生活を、1年半ほどしていました。その間に妻と知り合い結婚することにになりました。さすがに就職しないとまずいと思つて、新潟市美術館の学芸員に応募して採用されました。1985年の春でした。

**Q** 美術評論家への第一歩ですね。

**大倉** でも、やっぱり組織が肌に合わないんです。これはダメだとなつて「主夫を

やりたい」と妻に相談したら了承してくれて、1990年から10年間は家事と子育てを担当していました。その中で原稿の依頼も受けるようになり、美術評論家と名乗るようになりました。

**Q** 東京でなく新潟で美術評論の仕事をするのは難しくないですか？

**大倉** 東京を頂点とした美術界の階層構造に強い違和感があったので、むしろ新潟で土地に根差した作品と主に関わる機会を持つようになったのは良かったです。東京では70年代後半から急速に古いものが壊されていきました。90年代からは新潟も次第に東京化しているように感じていたので、古い建物の保存運動に関わるようになりました。

**Q** 美術ではなく建物ですか？

**大倉** 美術というのは、西洋から入ってきた枠組みにすぎません。その枠はずせば、生活の中の建物や景観など、すべて美術のように語ることが出来ます。

**Q** そこから「新潟まち遺産の会」の活動につながるんですか？

**大倉** そうなんです。建物の保存活動の中で、新潟の「町屋」に出会い、その町屋の一つで2000年に10人で共同運営する画廊「新潟絵屋」を始めました。展示された絵だけでなく、建物自体にも意味のある画廊です。部屋の壁も白くせず、空間全体を日本の室内のように感じることが

出来るようにしています。

**Q** つながるような気がします。

**大倉** 妙光寺の客殿が、古い建物をそのまま包む鞘堂として建て直されたのがとてもいいと思いました。ここでも幾度か展示をさせてもらいましたが、私は結局、「いい場所がいいものを飾ること」が好きなんです。場所が変わると絵の見え方も変わり、絵を変えると場所全体が変わります。

**Q** 境内に設置される28菩薩像はまさにそれですね。

**大倉** 阿賀野市の石工・漆山昌志さんは私がよく知っている方で、安穩廟の母が眠る墓のプレートも彫っていたいただきました。後継の斎木三男さんも、あたたかい人柄が作品に表れている方です。菩薩像を見る人たちが妙光寺全体を見る——それが『菩薩の森』になつていくと思います。

**Q** 『菩薩の森』の空間の完成が、楽しみです。（聴いた人・編集部 新倉理恵子）

★『だれのものでもない私』大倉宏著 2025年12月 発行・アートヴィレッジ 大倉さんの最新刊。  
★今年5月「斎木三男展」新潟絵屋にて（予定）  
★今年秋「ペーテル・ヘルシング展」砂丘館にて（予定）



大倉 宏さん

1957年新潟県生まれ。東京芸術大学美術学部芸術学科卒。新潟市美術館で学芸員として勤務後、フリーの美術評論家として新潟を拠点に活動している。「新潟絵屋」代表、「新潟まち遺産の会」代表、「砂丘館」館長。安穩会員。

やめて美術史や美学を学ぶ芸術学科に行くことにしたんです。描くことそのものを考える時間が必要だと思ったんです。

**Q** 大学ではどんなことを学んだんですか？

**大倉** 美術史や美学についても学びましたが、私にとってよかったのは芸術学科でも実技が必修だったことです。油絵・日本画・彫塑からの選択で、私は選ぶ人が少ない彫塑を選びました。指導教官が素晴らしい方で、結局4年間、そして2年留年して6年間彫塑に打ち込みました。立体的なも



## Q 安穩廟は跡継ぎを必要としない お墓の先駆けと聞きましたが?



### 寺院運営の困窮化

近頃、檀家の減少や後継者不在でお寺の維持ができないという話を耳にしませんか。早いところですが『寺院消滅』という本が大きな話題にもなりました。実は院首が所属していた宗門の研究所では40年以上前に、当時から過疎地での寺院の存続が危ういという調査を行い公表、宗教界では大きな反響を呼びました。

これを受けて日蓮宗では「過疎地寺院問題懇談会」が開かれ、院首がその座長を務めました。そこでは、過疎地に限らず人口は減少し、家族の形や考え方が大きく変化する。産業の形も変わっていくことは誰も止められない。檀家制度に依存してきた昔ながらの寺の体質改革、数が多すぎる寺の統廃合を将来的に進めるべきだと提言しました。しかし近年ようやく理解が進みつつありますが、当時は危機感が乏しく受け入れられませんでした。

### 墓は変わるし寺も変わる

そのころから、嫁いだ一人娘から実家の墓をどうしたらよいか、子どもがいない、子どもが娘だけの夫婦、未婚の女性等々から当時の住職である院首に相談が続いていました。そこで従来の墓制度が時代に合わなくなっていることを実感して、平成元年に跡継ぎ不在でも寺が会員制で基金運営を原資にして守る現在の『安穩廟』を実現しました。その発想と運営システムが斬新とNHKテレビが2日間連続で全国放送し、文字通り一気に日本中に知れ渡りました。その後も新聞各紙、雑誌、国の『厚生白書』でも取り上げられ、“永代供養墓”の先駆けと言われたのです。

37年を経て全国に永代供養墓は急増しました。でも未だに解決されていないのは“墓を変えても根本的な体質の変わらない寺”が多いことです。(院首記)



一昨年から始まった『菩薩の森』事業は、11ページでもご報告の通りでございます。ご協力に感謝いたします。

### 菩薩は仏様の一步手前にいる方々

さて、そもそも「菩薩像」とは何か? 「仏像」ではないのか? と疑問を抱かれる方もいらっしゃるかと存じます。「菩薩」とは、サンスクリット語 bodhisattva (ボーディ・サットヴァ)の音訳で、菩提薩埵を略した言葉です。菩提は悟り、薩埵は求める人という意味があり、つまり菩薩とは「悟りを求める人」を表しています。仏様はすでに悟りを開いた存在ですので、菩薩はその一步手前にいる方々だと考えて頂くと違いが分かりやすいでしょう。

実は今すぐにも成仏できるにもかかわらず、我々衆生を救済し、導くためにあえて菩薩の位にいる。とも言われています。一般的に「仏像」は装飾品の少ない簡素な姿が多く、「菩薩像」は華やかな衣装の姿が目立ちます。菩薩はいうなれば、仏様よりもより私達に身近な存在として、こうした親しみやすいあるいは憧れやすい姿をしているのかもしれない。

### 実は無数の菩薩がいる

妙光寺の『菩薩の森』事業では28体の菩薩像建立を目指しています。正確にいうと、28体の中には「不動明王」「愛染明王」を含んでおりますので、菩薩像は26体です。(明王もまた菩薩とは役割が違いますが、別の機会にご説明いたします)

実は菩薩は、26体以上が存在します。たとえば、妙光寺の本堂には中央にお釈迦様の仏像、そして脇侍とし

て4体の菩薩像をお祀りしています。それぞれ上行菩薩・無辺行菩薩・浄行菩薩・安立行菩薩といて、法華経の『從地涌出品第十五』に説かれている菩薩です。『從地涌出品』には、お釈迦様の説法を聞くために別の世界から、八恒河沙(八つのガンジス河の砂の数。つまり「数えきれないほどたくさん」の意)を越える菩薩が集まったと書かれています。さらにお釈迦様は、私達の生きるこの娑婆世界にも、六万恒河沙の菩薩がいて、仏滅後には、自分の代わりに法華経を弘めてくれると告げられました。この言葉の直後に、世界中至るところで大地震が起き、地中から数限りない菩薩たちが現れます。26体どころか、想像もできない数の菩薩が実は存在するのです。

### 『菩薩の森』は地湧の菩薩、を表現

妙光寺の目指す『菩薩の森』は、まさにこの数限りない菩薩が現れる光景を基にしています。ちなみに先に述べた四菩薩は、この地面から湧き出てきた菩薩たちのリーダーですので、日蓮宗の寺院ではお祀りしていることが多いのです。

さて、菩薩が数え切れないほどいるということは、はっきりとお経の中に説かれていますが、中でも名前が分かる菩薩となると限られてきます。また、名前しかわからず、姿形や得意分野が不明な方も多くいらっしゃいます。28菩薩についても、宗教学者の正木晃先生にご助言を頂き選んだ方々ですが、檀信徒の皆さんの中には初めて聞くお名前の菩薩だという方も多いでしょう。今回より、何回かに分けて、各菩薩の解説をしていきたいと思います。

院首夫人・小川なぎさんは、2年8カ月の胃がん闘病の後、2020年10月15日行年61歳で亡くなりました。『妙の光』誌上には人気シリーズ「寺庭から」を連載し、その温かい人柄は多くの檀信徒に慕われてきました。編集部の方のセレクトは、1994年3月第36号から、34歳のなぎさんの言葉です。

寺庭から again

1994年3月復刊第36号



早春雑感～「心のオアシス妙光寺」～ 小川なぎさ

お正月が終わると、妙光寺は1年中で一番暇な季節がやって来ます。特に今年のように、雪が降ってあたり一面真っ白になると、人の出入りも途絶えてしまいます。いつも静かなお寺は雪のせいでいっそう怖いくらいしーんと静まり返っています。

囲炉裏を囲んで雪見酒、しみりと語り合ったり、なにもしないでただ炭火を見つめ

ているのもいいかもしれない。私はこの時期、なんと言っても昼寝と読書です。炬燵にごろんと横になる午後のひとときは最高です。のんびりさせてもらいました。お腹の贅肉が増してしまったのが辛いのですが、体力、気力ともに「エネルギーの充電」「パワーアップ」といった感じです。

3月に入り、なんとなく明るくなって春めいてくると、シーズンインです。団体参拝の問い合わせ、お祓いや地鎮祭の申し込みなどで電話も鳴りだします。そういえばもうそろそろお彼岸ですよ。庭の植物もいっせいに芽吹いたり、気温が上がってくると新しい力がわいてくるような気がします。

昨日はお寺に営業でちょくちょく見えていたKさんが転職の挨拶に来られました。私の実家の両親と同郷で何となく親しくなり、仕事以外の話もよくしました。彼は「心のオアシス妙光寺」と言うのが口癖で、「またあ、口がうまいね」と笑っていたのですが、この日「ホント妙光寺に来るとほんと出来ました」と言って去って行きました。

これから始まる妙光寺の1年を考えた時、本堂やお墓のお参りだけではなく、なんだかわからないけれどほっとできる場所、元気が出てくる場所、毎日の生活の中でいたたまれなくなった時、どこかでそっと休みたくなった時にやって来たい場所、そんなお寺だったらいいなあ、と思います。

うちの子どもたちは今遊びざかりです。自然の豊富なお寺に住まわせてもらっているおかげで、それぞれの友だちがやって来て多い時には10人にもなり、元気な歓声が境内から聞こえてきます。

賑やかに人々が集ったり、しめやかな祈りの場所としてのお寺。「心のオアシス妙光寺」本当に皆さんにそう思ってもらえれば嬉しいのですが。



角田山妙光寺インフォメーション

「菩薩の森」目標額まであとわずか

一昨年の末から「菩薩の森」事業にご協力をお願いを申し上げてきました。皆様方から28体の菩薩石像を奉納いただき、その経費で境内の整備と建物の改修を進めるのが趣旨です。おかげさまで目標金額直前にまで到達し、28菩薩像の目途がつかしました。早くても3年はかかると思定していたのですが、1年余りの速さに驚き感謝するばかりです。重ねてお礼申し上げます。

菩薩像もすでに安置の7体に加えて2月末現在で6体が完成し、5月の開山会での開眼法要までにさらに増えます。個々の菩薩像の関係者には、銘板に刻むお名前の確認を直接お知らせいたします。

奉納額10万円から銘板にお名前を刻みますが、銘板には余裕がありますのでこれからの奉納お申込みも歓迎です。ご奉納は一口1万円からお受けいただけますので、引き続きご協力をいただければ幸いです。冬期間の工事は5ページで



『菩薩の森』奉納ご入金現況 (2026.2.17現在)

金額	2026.2.17までの総合計	
	件数	合計金額
1～9万円	185	3,560,000
10～99万円	101	13,450,000
100万円	6	6,000,000
200万円	15	32,000,000
合計	307	55,010,000
目標額		56,000,000

詳細は次号でご報告を申し上げます。

菊池事務職員の退任

事務職員として3年間、昨年からは沙弥(僧侶見習い)として檀徒宅の月参りやお墓でのお経をお勤めしてきた菊池崇子さんが、一身上の都合により3月末で退職することになりました。電話や事務受付等でも皆様にお世話になりましたこと感謝申し上げます。後任が見つかるまでは、これまでの柿崎さんと榎谷さんの2人体制となります。対応に時間がかかるなど、ご迷惑をおかけすることと思いますがご協力のほどお願い申し上げます。

檀徒用安穩廟を増設します

従来からの家の墓をお持ちの方で、後継者不在に悩む方が増えています。俗に墓じまいと言うようになりませんが、それでは現存する方の埋葬先がありません。妙光寺では「檀徒用安穩廟」



右と同じ壇を左側に増設

と称して、現在の墓石を活用した個別形式の集合墓のご用意があります。これまでの区画が残りを残すため、この春、現在地に隣接して増設します。使用規則は安穩廟と変わりますが、金額は抑えてあります。ここに従来墓石の撤去費用が加算されますが、処分費用が不要で人件費のみです。ご検討の方は直接お問い合わせください。

本堂前に枝垂れ桜

令和6年に枯れた本堂前の歴史的な松ですが、何か代わりを植えてくださるとの匿名による奉納お申し出をいただきました。検討の結果、本堂前のシンボルになり易く比較的成長の早い木として枝垂れ桜を選びました。予算いっぱい成木を植えましたので、今年の春から



花が見られます。楽しみにお出かけください。

本堂の幔幕

これまで行事の際に本堂を飾る幔幕は、本堂新築の際に升湯地区の皆さんから奉納いただいた物でした。以来25年を経てすっかり色あせて痛みもありました。このたび同じ升湯地区の高橋英一・摩谷子ご夫妻から新調奉納いただきました。皆様方から清々しいお気持ちでお参りいただけます。感謝申し上げます。

